

自由とは何か。ベルクソンはこの問いに対して、「自由に行為することは、自己を取り戻すことであり、純粋な持続のうちに身を置き直すことである」(DI 174<sup>1</sup>)と述べた。ベルクソンにとって、自由とはたんなる選択の自由ではない。自己とは持続のうちでたえず変化していくものであり、したがって同一的にとどまる自己がいくつかの選択肢から自分の行動を選ぶということはできない。仮に複数の選択肢が存在していたのだとしても、それらのあいだで逡巡するという過程それ自体がすでに自己の変化であり、したがって選択肢に対する感じ方もそれに応じて刻々と変化するからである。「ためらいそのものの効果によって生き、発展するひとつの自我があり、自由な行為はそこから熟れすぎた果実のように出てくる」(DI 132)のである。たしかに、いかなる行為であれそれがなされた後であれば、回顧的にその動機を再構成することができる。しかしそれは行為のさなかに身を置く者にとっては不可能な事柄である。行為の条件をすべて知ることは、実際にその行為をなすことなのである。

これはベルクソンが『意識に直接与えられるものについての試論』(1989)において展開した議論である。未見の未来を創造すること、これこそがベルクソンにとっての自由なのであり、この意味で自由な行為とは創造行為とほとんど同義である。「私たちが自由なのは、私たちの行為が人格全体から流れ出ているとき、行為が人格全体を表現し、人格に対して、芸術家と作品のあいだに時に見いだされるような定義しがたい類似を持つときである」(DI 129)。もちろん完全な自由というものが稀であることはベルクソン自身も認めている。私たちはつねに自分の人格全体を賭けて行為するわけではなく、また私たちのきわめて個人的な感情や感覚は、本来的に非人称的な面を表現するものである言語によって覆い隠される傾向にあるからである。したがって自由には度合いが存在するのである。

ところで自由はまた、道徳や責任といった観念と背中合わせである。行為の道徳性や責任を問うことができるのは、当人がみずからの判断でその行為を行うからであろう。したがって自由がないところには道徳も存在しない。また自由に度合いがあるからこそ、故意の犯罪と不幸な事故を区別することが可能にもなるだろう。ベルクソンが道徳の問

---

<sup>1</sup> 本稿におけるベルクソンの著作の引用は以下の略号によって示し、頁数を併記した。講義録以外の著作は、フレデリック・ヴォルムスによるクリティカル・エディションを使用した。またカントの著作は、アカデミー版のカント全集の巻数と頁数を示した。

DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience*

EC: *L'Évolution créatrice*

DS: *Les Deux sources de la morale et de la religion*

C-II: *Cours II-Leçons d'esthétique. Leçons de morale, psychologie et métaphysique*, PUF, 1992

題について論じたのは、最後の主著となる『道徳と宗教の二源泉』（1932）においてであったが、道徳とそれに結びつく宗教についての考察は、『意識に直接与えられるものについての試論』において、時間と自由についての考察から出発したベルクソンが、『物質と記憶』（1896）と『創造的進化』（1907）というふたつの成果を踏まえつつ、最後に問うた問題だった。ベルクソンの道徳論には、それまでの彼の思想のすべてが流れこんでおり、それを検討することはベルクソン哲学全体を検討することでもある。したがってこの道徳論を考察することで彼の独特の発想や思考法をあらためて浮かび上がらせることができるだろう。本稿では『二源泉』における道徳論を『試論』以来の時間論、自由論と接続させることで、ベルクソンの思想の発展を跡づけるとともに、彼の思想において自由と道徳、あるいは義務や行為がいかに関係を考察する。

そのために本発表では、ベルクソンの思想をカントの道徳哲学との比較しすることを試みたい。周知のように、自由と義務はカントの道徳哲学の中心をなす概念であった。ベルクソンは終始カントに対し批判的だったが、両者ともに自由の存在や魂の不死あるいは存続を肯定し、哲学史上の大問題を人間の知性ないし理性に由来する錯覚とみなすなど、実のところ表面的には類似する点も見いだされる。しかしその内的な論理構成は全く異なっており、カントの思想と比較対照することでベルクソンの独特な論理をより際立たせることができるだろう。カントの倫理学においてはあくまでも人間性を高めることが目指されているのに対し、ベルクソンの主張はやがて、神秘家による人間の条件の超越へと向かうことになるが、そこには人間や、人間の知性ないし理性、自由に対する両者の全く異なる発想と論理が存在しているのである。

## 責務と自由

上でも確認したように、少なくとも論理的には責務は自由を前提としている。それをしないこともできるという意識があるからこそ、義務は強制的なものと感じられるのである。ベルクソンが1891-93年に行ったとされるアンリ4世校での道徳哲学講義での例を引き合いに出すならば、ソクラテスは脱獄し死刑を逃れることもできたが、彼はそれが義務に反するとかんがえたのであり、「責務的とみなされる行動の本性は、もし望むならそれを差し控えることができるという点にある」のである（C-II 51）。こうした義務と自由の関連については、晩年の『道徳と宗教の二源泉』においても変わるところはない。「ある存在が責務を負っている *obligé* と感じるのは、その存在が自由な場合だけであり、個々の責務 *obligation* は、個別に取り上げるならば、自由を前提としている」（DS 24）のである。こうした点において、ベルクソンの道徳思想は公刊こそされなかったものの、かなり初期の頃から懐胎されていたことが分かる。

ところでベルクソンは上記の道徳哲学講義において、道徳哲学に関するカントの功績として、道徳性と自然を対立させたこと、道徳的な人格性の尊厳を明らかにしたことと

並んで、自由と道德の關係を示したことを挙げていた (C-II 107-)。この意味で、自由と道德の關係に関するベルクソンの考察は、実のところカントの発想を継ぐものとも考えることができるだろう。

事実、周知の通り、カントにとって自由は、「私たちが知る道德法則の条件」(V 5)であった。なぜなら、「自由は、ひとりそれのみがアプリアリに実践的なものであり、その自由がなければ、どのような道德法則も、道德法則に応じたいかなる帰責も可能ではない」(V 97) からである。ベルクソンが見てとっていたように、ある主体に対し、行った行為の責任を帰すことができるのは、その主体がその行為を行わないこともできたということが可能な場合だけである。

とはいえ、カントにとって自由とは直接認識することはできない超越論的な理念である。われわれの認識対象はあくまで現象としての自然であり、この自然は必然的な自然法則にしたがうものとしてわれわれに現れるからである。そのためカントの場合、直接に意識されるのは自由ではなく道德法則の方である。カントは、自分の君主が死刑によって脅しながら偽証を要求してくるという例を挙げている。この場合、命を賭してでも偽証を拒むことは可能だろうか。カントによれば、実際にどうするかは別としても、それは十分に可能であり、この時偽証を求められた者は、「自由を自分の内に認識」することになる。そしてこの自由は、「道德法則がなかったとすれば認識されないままにとどまっていたであろう」(V 30) 自由だとされるのである。この意味で自由と道德法則は互いに結びあっており、自由が道德法則の条件であるとともに、道德法則は自由の認識根拠でもあった (V 5)。

ところで人間のような理性的ではあるが有限な存在者の場合、道德法則は命法というかたちをとる。純粹に知性的な存在とは異なり、感性を備えている人間は、各自の傾向性によって誘惑されることになるが、理性はそうした意志を強制的にしたがわせるのである。道德法則ないし実践的規則は、「理性が完全にそれだけで意志を規定する根拠とはなっていない存在者にとっては、命法、すなわち行為への客観的強制を表現する〈べし Sollen〉によって示される」(V 20) のであり、「私たちのように、いまだ別の種類の動機である感性を通じて触発される存在者にとっては、理性だけならばするであろうことがつねになされるとはかぎらないので、行為のあの必然性がひとえに「べし」とのみ呼ばれる」(IV 449) のである。

つまり理性だけでなく、感性をそなえ、さまざまな欲求や感性的な刺激を受容する人間のような存在者においては、道德法則はひとつの命令としてあらわれることなり、ここに責務ないし義務が発生することになるのである。ここには純粹な知性でもなく、またたんに本能にしたがうだけの動物でもない、人間という存在に特殊な立ち位置があるだろう。人間のような理性的存在者は、「感性界に属するものとしては、自分が他の作用する原因と同じように、必然的に因果性の法則にしたがっていることを知っており、そのような理性的存在者の意志が、この自由の意識を通じて、実践的な事柄にあっては

それでも同時に他の面にあつて、すなわち存在者自体そのものとしては、事物の叡智的な秩序において規定されうるみずからの現存在を意識する」(V 42) ののである。人間は理性によって叡智界に属しながらも、感性を有することによってまた現象にも属している。この二重の存在様態こそが、道徳法則が一種の命令として現れる理由なのである。

ここで重要なのは、カントが人間の認識能力であれ、道徳的責務であれ、それらがすでにできあがった状態で想定しているという点である。ベルクソンのカントに対する批判はまさにこの点にかかわってくるだろう。例えばカントはこのように言っている。「カテゴリーは経験的起源を持たず、ア priori に純粹悟性のうちにその座と起源を持つ」(V 141)。「道徳法則はいわば純粹理性の事実として与えられていて、私たちはその事実をア priori に意識し、またこの事実は、必自然的に確実なものである」(V 47)。

ところで、事物に対し不変の位置を前提とすること、これこそがベルクソンが一貫して拒否してきたことだった。現在の状態が同一的なものとして過去から変わらずに存在してきたと想定することは、時間の作用を無視することである。それは道徳であれ、カテゴリーのようなものであったとしても変わりはない。「カントは、悟性とそのカテゴリーの生成を描きなおすこともはや思いつくことができなかつた」(EC 358)、「社会的な要求にこそ、責務は由来していた」(DS 17) といったベルクソンの言葉は、人間の知性であれ道徳的な義務であれそれが生まれてきた過程からとらえようとする姿勢を表しているだろう。

ベルクソンは人間の知性それ自体の発生を生命の進化のうちに求めることになる。われわれの思考は、「特定の事物に働きかけるために、特定の状況において、生によって創造された」ものであり、「生のひとつの流出物ないしひとつの側面にすぎない」(EC VI) のである。「知性を生命の一般的進化のなかに位置づけなおすことのない認識理論は、どのようにして認識の枠組みが構成されたのかも、どのようにして私たちがそれらを拡張したり乗り越えたりするのかも教えてくれはしないだろう」(EC IX)。『創造的進化』以降のベルクソンの思想はまさにこの点にかかわっている。

## ベルクソンの発生論

私たちひとりひとは、自分自身へと向きなおるならば、当然自由に自分の好みや欲望、気まぐれしたが、他人のことを考えなくてもよいと感じる。だが、そうした気持ちが起こるやいなや、それに反対する力が突如現れる。それは、すべての社会的な力がすべて集められたものである (DS 6)。

知性が従事していた仕事は、……定義上社会的な要求に従属したふるまいをより論理的に一貫したものにすることだった。だがこの社会的な要求にこそ、責務は由来していたのである (DS 17)。

『道徳と宗教の二源泉』において、ベルクソンはこのような言葉を繰り返している。つまり責務とは単に個人的な義務ではなく、社会を前提とすることによって初めてその意義を見いだすことになるものなのである。ここには『創造的進化』以来の、ベルクソンによる進化論哲学が見いだされる。

『創造的進化』のベルクソンによれば、生命とは進化そのものである。そして進化は地球上の歴史において、大きく2度分岐した。1度目は植物と動物へ。2度目は、動物における本能と知性へ。そして本能の線の先端に位置するのが昆虫、それも蟻や蜂のような膜翅類であるのに対し、知性をもっとも先まで進化させたのが人間であった。そして重要なのは、本能と知性というどちらの進化線上においても、社会が生みだされたという点である。「蟻が蟻塚のために作られているのと同様に、人間は人間社会のために作られた。……自然が、私たちが知的な存在にしたというまさにそのことによって、私たちにある程度まで社会組織の種類を選択する自由を残してくれたのだとしても、それでも自然は私たちが社会のなかで生きることを課したのである」(DS 283)。この意味で人間の社会に責務というものが存在するのは、人間が生物の一種であるからであり、それ故に責務とは人間が生物種であるかぎり逃れることのできない条件である。

この意味で、ベルクソンは、もっとも純粋な定言命法とは、一瞬だけ知性の光が差した働き蟻が感じる命令であると述べる。ひたすら本能にしたがって行動する働き蟻が知性を手にしたならば、自分がなぜ働いているのかを疑問に思うだろう。しかしこの問いには答えはない。まさしく「しなければならぬから、しなければならぬ」のである。この理由のない義務、ベルクソンにとってはこれこそがまさしく純粋な定言命法なのであるが、これは生物であるという事実から由来するものである。つまりベルクソンにとって責務とは「もっとも一般的な生命現象にむすびつく」(DS 23)のものであるとともに、「生命の必然性」(DS 96)なのである。

責務とは社会に秩序をもたらす、安定させるために生命がもちいる方策であり、知性はそれを論理的に説明するにすぎない。「責務は、生命がある種の目的を実現するために、知性や選択、したがって自由を求めるとき、必然性が生命の領域において取る形態そのものとしてわれわれに現れる」(DS 24)。つまりベルクソンは、道徳的な責務とは、生命の進化の途上で知性を獲得した人間に対して生まれてきたものとみなしている。蟻や蜂の場合は本能によって行動が自動的に定められているため、責務を感じることはおそらくない。人間を生命の進化線上に位置づけること、そして人間の知性もまたその進化の途上で獲得された能力とみなすこと、これこそがベルクソン哲学における人間へのアプローチである。つまりカントのように人間の能力をすでにできあがった一組の能力と考えるのではなく、それ自体が進化の流れのうちで生成してきたものとみなすこと。ここにまさしくベルクソン流の発生論が、あるいはこう言ってよければわれわれの認識の条件を探る超越論的な視座があるのである。

ところで重要なのは、以上のような社会を内向きに安定させるような道徳とはことなる今ひとつの道徳、すなわち「閉じた社会」形成する「閉じた道徳」に対して、人類全体へと広がっていく「開いた道徳」もまた存在するということである。

閉じた道徳と開いた道徳の差異は、端的にいえばその対象が家族や祖国といった自分が属している集団であるか、それとも人類全体を包括するかどうかという点に認められる。ベルクソンによれば家族、祖国、人類全体という三つの集団は、単に規模の大小によって異なっているのではない。前二者と人類全体とのあいだには越えがたい境界線が、すなわち程度の差異ではなく本性の差異が存在しているのである。「私たちが生きている社会と人類一般のあいだには、閉じた者と開いたもののあいだにあるのと同じ対照がある。このふたつの対象のあいだの差異は本性の差異であって、たんなる程度の差異ではない」(DS 28)。

家族や祖国への愛は対象が閉じられている。つまりこれらの愛は、「自分の」家族、「自分の」祖国を選択するのであり、したがってそこには排除の観念が存在することになる。家族愛も祖国愛も、自分の家族、自分と同じ国民という集団をつくることで、それにそぐわないものを排除することになるのである。それに対し人類への愛はひたすらに愛であるとされる。この愛はその対象をこえて広がっていくのであり、それが「人類に到達するのは、人類を横断することによってでしかない」(DS 35) のである。

ここで重要なのは、先に述べた閉じた道徳こそが生命から由来するものだという事である。「われわれが社会的義務の底に見いだした社会的本能は、それがどれほど広大なものであれ、つねに閉じた社会を目指している」(DS 27)。「人間の本来的で根底的な道徳構造は、単純な社会、閉じた社会のために作られている」(DS 54)。つまり道徳というものは本来、閉じた集団をつくり、それを安定させることを目的としているということである。この意味において、人類全体を対象とする「開いた道徳」は生物としての人間を越えるものとなるだろう。そしてこのような道徳は、ごくわずかな人物によってのみ達成されるものである。ベルクソンが挙げるのは、キリスト教の聖人の他、ギリシャの賢人やイスラエルの預言者、仏教の阿羅漢のような人物であるが「彼らは自然の抵抗を粉碎し、人類を新たな運命へと高めた」(DS 48) のである。

ここで彼らが体現した開いた道徳について長々と論じる余裕はない。だがひとつ確認しておくべきは、こうした特別な個人によって体現される道徳は、強制ではなく呼びかけという状態で作用するという事である。つまり、ひとつのモデルを皆が模倣するという状態によってである。このようなモデルとなる人物が存在し、他の人間がそれを模倣することによって、「他の人間は、その魂が人類愛へと開かれていく」(DS 102) のである。こうして道徳には、「圧力 *pression*」と「熱望 *aspiration*」というふたつの状態があることになるのである (DS 48)。

とはいえモデルとなる人物が体現する道徳に呼びかけられるには、呼びかけられる側がその情動を受け取るからでもある。この意味で、「私たちのうちにも神秘家がひとり

眠っており、ただ目覚める機会を待っている」(DS 102) のである。人類愛に到達した人たちの言葉を聞くこと、それによってみずからも開かれた道徳へと入り込むこと、これはわれわれに残された課題であり、人間という条件を越えていくことでもあるだろう。

終わりに

ここまで見てきたように、ベルクソンにとって道徳はふたつの様態で現れる。ひとつは社会を閉ざすことと安定させる「閉じた道徳」であり、これは社会を形成するという生命に内在する傾向に由来するものである。それに対し、特定の集団や社会を越えて人類全体に及ぶ「開いた道徳」はいわば生物としての人間という条件を越えていくものである。この意味で「開いた道徳」を体現する神秘家は、「そのひとりひとりが、新しい種が出現したならばそうしたであろうように、実創造的進化の努力を体現している」人たちのなかの「人」である」(DS 141)。

ここにカントとの鋭い対比を見出すことができるだろう。例えばカントは次のようにいっている。「人間が理性を有するという事情は、かりに理性が人間にとってひたすら、動物なら本能が準備する事柄のために役立つにすぎないなどということになるならば、価値という点でたんなる動物性を超えて人間を高めることが全くないことになる」(V 61)。つまりカントにとって、人間の理性が動物における本能と同じ役割を果たすならば、人間は動物と同じ位置にとどまることになるのである。

一方ベルクソンは、道徳を責務として考えている限り、人間を動物と同列におくことにためらうことはないだろう。むしろ人間の特殊性は、みずからの生物的条件を越えていこうとするところ、閉じた道徳から開いた道徳へと移行していくところにあるのである。この意味において、家族愛や祖国愛は生物としての人間に自然な傾向であるのに対し、人類愛はむしろ努力によって手に入れるべきものであるとされている。もちろん人類愛にもとづく開いた社会は現在も尚達成されてはいない。しかしこれまでの歴史上幾人かの個人によってその可能性は垣間見られてきた。そこにベルクソンが言及する神秘家たちの重要性があるのである。そして彼は、この開いた社会の到来を未来へと託している。予見不能な未来へと開かれていること、そこではいまだ達成されていない自由や平等の理念が実現されること、ベルクソンが最後の主著に託した思いとはこのようなものだったのだろう。われわれにはここに時間の哲学者としての彼の面目を見ることができるよう思われる。「未来はあらゆる進歩へ、とりわけ今日では実現不可能で、おそらくは考えることすらできない自由や平等の様々な形態が可能となるであろう新しい条件の創造へと開かれている」(DS 300)。そしてこれはおそらく、私たちに残された課題なのである。